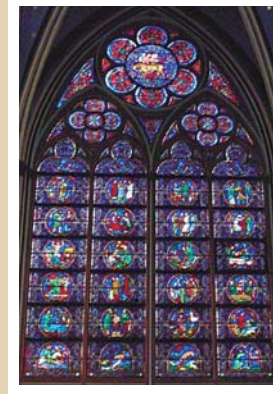


ISBN978-4-87354-517-2
C3031 ¥1900E
定価(本体1,900円+税)



拒絶の投票

21世紀フランス選挙政治の光景

土倉莞爾 著

関西大学
出版部

拒絶 の 投票

21世紀フランス選挙政治の光景

土倉莞爾 著

関西大学出版部

表紙写真●セーヌ川とノートルダム寺院
裏表紙写真●ノートルダム寺院・ステンドグラス

拒絶 の 投票

21世紀フランス選挙政治の光景

土倉 莞爾 著

関西大学出版部

拒絶の投票

21世紀フランス選挙政治の光景

土倉 莞爾 著

関西大学
出版部

拒絶 の 投票

21世紀フランス選挙政治の光景

土倉 莞爾 著

関西大学出版部

【本書は関西大学研究成果出版補助金規程による刊行】

まえがき

本書は、1999年EU議会選挙から始まって、2011年フランス県議会選挙までのフランスの主だった選挙をとりあげ、ここ10年あまりの現在におけるフランス選挙政治の光景を考察しようとするものである。

著者の主張したい点をあらかじめ簡単に説明させていただきたい。第1に、本書の題名にあてた「拒絶の投票」の意味であるが、2002年のフランス大統領選挙と総選挙を分析したパスカル・ペリノーらの著書である *Le vote de tous refus* から借用したものである。「拒絶」とは何か？ 著者の考えでは、投票行為を拒絶することも含まれる。そして、投票の結果として、これまでの政治状況、政治光景を拒絶することになるのが「拒絶の投票」なのである。この意味で、著者は2002年の大統領選挙と総選挙は、21世紀フランス選挙政治において重要な選挙であった、と考えている。すなわち、2002年の大統領選挙は、1990年代の政治的矛盾であるところの、投票率の低下、極右の増大、政党システムの溶解化、既成支配体制への異議、政治不信の増大などが絶頂に達したと言える象徴的な選挙だったからである。なかでも、もっとも印象的なのは、社会党のジョスパンが大統領選挙第2回投票へ進めなかったことである（社会党への拒絶）。それでは、現職立候補者シラクは拒絶されなかったのか？ いや、第1回投票の得票率としては、第5共和制史上第1回投票最高位の投票者としては、最低の得票率だった（シラクへの拒絶）。ジョスパンを破り、第2回投票に進んだ極右のルペンはどうか？ ルペンは、第2回投票でシラクに大差で敗れただけでなく、続く総選挙でFNは惨めな結果しか残せなかった（ルペンへの拒絶）。総じて、大統領選挙第1回投票に見られるように、投票率も低下している。これもさきに述べたように、拒絶のひとつの形態である。簡単に要約すれば、現在の代議制民主主義は低下し続けて来ている。フランスの2002年大統領選挙はその典型をなしていた。付言すれば、フランスにおける2005年のEU憲法条約国民投票におけるフランス国民の否決もやはり「拒絶の投票」

であろう。著者は、国民投票におけるこの否決は、EUの危機の象徴だけでなく、代議制民主主義の構造的危機の一環であるという立場に立っている。

第2に、それにもかかわらず、2007年の大統領選挙は、2002年の逆の様相を帯びる。すなわち、投票率は上昇し、右翼の大統領候補者サルコジは前任大統領のシラクを押し、シラクの2002年大統領選挙第1回投票の得票率をやすやすと凌駕した。社会党候補ロワイヤルも、極右を圧倒し、かなりの得票率で第2回投票に進んだ。大統領選挙第2回投票は12年ぶりの左右対決となった。サルコジが言い出して、2007年大統領選挙、総選挙のキーワードとなった「決別の投票Le vote de rupture」はこれらの選挙の特色をよく表現している。これらの選挙には2002年大統領選挙のトラウマがあったから、このような選挙になったとも言われている。2002年の記憶が正常な大統領選挙に戻したかのようにであった。しかし、ここでは詳説はしないが、代議制民主主義は機能を復元したのだろうか？ 著者はそのようには思っていない。

第3に、フランスは選挙の多い国であるが、問題は、かなり異質な選挙が重層的に加わることによって、それらが関連し、絡まりあい、いっそう複雑な選挙政治の様相を帯びることである。とくに著者の念頭にあるのは、EU議会選挙である。また、本書においてとくに大事であるのは、2005年のEU憲法条約の国民投票である。フランス人は、国民投票において、EU憲法条約を否決した。これの原因となり、またその結果が投射されるのがフランスの選挙政治である。EU議会選挙とEU憲法条約の国民投票はフランス選挙政治の重要な部分を構成していると著者は主張したい。

ヨーロッパ(EU)とフランスの関係、これは難問である。簡単に言えば、フランスの選挙民はEU議会選挙にそれほど関心を持っているとは言えないし、EU憲法条約を国民投票で否決したように、フランスとヨーロッパ(EU)は遠い関係にある。しかしながら、EU議会選挙とEU国民投票は、好むと好まざるにかかわらず、フランスの選挙政治に深い影を落としてい

る。

ドイツの哲学者ユルゲン・ハーバーマスは「もし、2009年のEU議会選挙までに、何を最終目標としてEU統合がなされるのかという問いを、この選挙でのヨーロッパ人全員の投票のテーマにすることができなければ、ヨーロッパの将来はネオリベラル派の意に即した形で決定されてしまう」(ハーバーマス 2010, 100)と言ったことがある。この見解は性急だったし、現実はそのように展開しなかったが、総体として、EUと選挙民の関係は「制度や政策の面ではかなりの進展が見られるが、世論が必ずしもそれについてきていないのである」(塚田 2010, 37)というところが実態であると思われる。

重層的に加わる異質な選挙について付言したい。本書のあとがきのところでぎりぎりに触れることができたが、2011年3月22日と29日、フランス県議会選挙が行なわれた。この選挙は、①2012年の大統領選挙を占う、②棄権55%、③サルコジ政権与党の惨敗、④FNの躍進で特徴づけられるが、一般にこの選挙のキーワードは「制裁の投票Le vote de sanction」であった。

第4に、選挙とは何なのか、という問題である。安易に結論を付けてはいけませんが、著者は、選挙とは祭りであると言っておきたい。想起されるのは、2011年2月11日、エジプトでムバラク政権の崩壊である。それについて酒井啓子は次のように言う。「今回民衆運動の勝利が、決定的にエジプト社会の政治意識を変えたことは間違いない」。重要なのは、「反体制デモは楽しく参加できる、という例を作ったこと」(酒井 2011)である。すなわち、反体制デモは祝祭であったし、それが権力を変えたという視点が必要である。ここで、反体制デモにおいても顕著な動きを見せるフランスに視点を戻したい。多すぎるくらいの選挙に恵まれたフランス。そこに選挙というひとつの「祝祭」に参加する平和なフランスを見ることができる。と同時に、意識的にせよ、無意識的にせよ、どんどん「拒絶の投票」や「決別の投票」や「制裁の投票」に票を投じる選挙民の姿を思い浮かべることができるのである。

「下部構造が上部構造を規定する」とマルクス主義は教える。たしかに、選挙民の行動を歴史構造的に規定されているという観点から、経済・社会的構造に分析を進めて行くという方法の意義についてその重要性を認めることに著者はやぶさかではない。しかしながら、選挙における投票行動は、あくまで上部構造の問題としてとらえたほうが好い、というのが著者の考えである。著者はそのように21世紀のフランス選挙政治の光景を解明したつもりである。

文化と芸術の国フランス、まことに多くの観光客が訪れる「美味し国」フランス。しかし、フランスは「選挙の国」でもある。好い意味でも悪い意味でも、現代フランス選挙政治は現代政治学にとって重要な材料を提供してくれる宝庫である。それについて適切に理解可能な言説にまとめてゆくことができたかどうかは、読者の判断を待つほかはないのである。

目 次

まえがき

第1章 フランスから見た1999年6月EU議会選挙 …………… 1

- 1 経緯
- 2 1999年EU議会選挙
- 3 問題点
- 4 展望

第2章 2001-02年フランス市町村選挙・大統領選挙・総選挙…35

- 1 5年任期制
- 2 大統領制と選挙サイクル
- 3 大統領選挙の変遷
- 4 2001年フランス地方選挙
- 5 イモビリズム
- 6 社会党の敗北
- 7 ルペンの進出
- 8 ラファラン内閣
- 9 2004年地域圏議会選挙

第3章 現代フランスの極右とポピュリズム ……………81

はじめに

- 1 EU統合への懐疑論
- 2 FN現象の分析
- 3 代議制の危機

おわりに

第4章 2005年フランスにおけるEU憲法条約国民投票の
否決の意味 107

はじめに

- 1 2002年フランス大統領選挙・総選挙
- 2 2004年EU議会選挙
- 3 2005年フランス国民投票でのEU憲法条約の否決
- 4 2007年フランス大統領選挙・総選挙
- 5 2009年EU議会選挙

おわりに

第5章 決別の投票—2007年フランス大統領選挙の考察—..... 157

はじめに

- 1 UMP
- 2 社会党
- 3 UDF
- 4 政治意識

おわりに

参考文献

あとがき

索引